

青年期の友人関係研究の展望 — 1985年以降の研究を対象として —

筑波大学心理学系 落合 良行

筑波大学大学院 (博) 人間総合科学研究科 竹中 一平

Adolescent friendship: A review of studies since 1985

Yoshiyuki Ochiai and Ippei Takenaka (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

This paper reviews studies since 1985 that examine adolescent friendship in terms of its structure, its factors and their relations, and its development. While the focus during the 1990s was on structure, over the last few years, this has shifted to relational issues. However, insights from relational studies have not been utilized in reexamining the findings obtained in earlier structural studies, and there have been few development studies. Accordingly, we suggest that future research into adolescent friendship, while continuing to deepen our understanding of relational aspects, needs to reexamine the structure of adolescent friendship based on relational findings and to consider developmental changes.

Key words: review, adolescence, friendship

児童期における生活の中心が「家庭」であるのに対し、青年期において青年は、「家庭」と徐々に距離をおき「友人」にウェイトをおいていく(宮下, 1995)。青年期は、生涯にわたる心の友を得られる時期であり、友人との交流の中で、精神的安定が得られ、人間関係を学び、成長していく(碓井, 2000)。このように、青年における友人関係は重要な意味をもち、青年期において欠かすことの出来ないものである。

しかし近年、青年の特徴として、わずらわしい関係に巻き込まれることを恐れ友人関係に深入りしなかったり(千石・鐘ヶ江・佐藤, 1987)、表面上は素直で調子が良く人当たりも良いが、自分を失う不安が強く人と深く関わらななかったり(小此木, 1984)といった特徴が挙げられており、青年の友人関係は深い関わりを避け表面的な関係にとどまる「希薄化」の状態にあることも指摘されている。

そこで本研究は、友人関係の希薄化が指摘され始

めた1980年代半ばから2003年までにおける青年の友人関係に関する研究を概観し、青年期の友人関係研究がどのように展開・発展してきたかを、友人関係の構造に関する研究、友人関係の構造と様々な要因との関連研究、友人関係の発達の变化に関する研究に分けて論じる。その上で、これまでの友人関係研究における問題点と今後の展望について考察することを目的とする。

1. 友人関係の構造に関する研究

本章では、友人関係の構造に関する研究についてまとめる。友人関係の構造に関する研究は、友人関係を分類、類型化することによって構造を明らかにしようとする目的で行われてきた。これらの研究は、トップダウン的に特定の要因に注目し、その要因を用いて友人関係を類型化する研究と、ボトムアップ的に実際の友人関係を収集し、それらの分類

から類型化する研究に分類された。前者の代表として、心理的距離と同調行動に注目した上野・上瀬・松井・福富（1994）の研究を紹介する。また、後者の代表として、友人関係の現代的特徴に注目した岡田（1993a）の研究、友人との具体的なつきあい方を分類し類型化した落合・佐藤（1996）の研究、友人関係の活動的側面と感情的側面から構造を検討した榎本（1999）の研究を紹介する。

1-1. トップダウン型の研究

上野ら（1994）は、東京都生活文化局（1985）の調査を参考にし、友人関係を捉える視点として、友人との心理的距離のとり方と仲間はずれにならないように一緒に行動する消極的な同調行動傾向に注目した。東京50km圏内に在住する高校生を対象とした無作為抽出のサンプリング調査を行い、同調性と心理的距離のとり方の組み合わせから、交友関係を「独立的交友」「個別的交友」「密着的交友」「表面的交友」の4群に類型化した。「独立的交友」とは、友人との距離はとらないが同調性の低い群であった。「個別的交友」とは、友人との距離を大きくとり、同調的な行動をとらない群であった。「密着的交友」とは、友人との距離をとらず同調的な群であった。「表面的交友」とは、友人との距離を大きくとろうとしながら行動的には同調する群であった。

1-2. ボトムアップ型の研究

岡田（1993a）は現代青年に特徴的な友人関係に注目し、対人関係が深まる場面に恐怖を感じる「ふれあい恐怖」や、アニメなど無機質な趣味に没頭し対人的に退却的な傾向をしめす「おたく」などとの関係を検討した。大学生を対象とした質問紙調査を行い、深刻さを回避し楽しさを求め友人といつも一緒にしようとする「群れ志向群」、ふれあい恐怖と関連し、互いに傷つけないように友人と距離を置いた関わり方をしようとする「対人退却群」、心を打ち明け一人の友人との関係を大切にする「やさしさ志向群」の3種類の友人との関わりを見いだした。

落合・佐藤（1996）は、青年期にみられる友人とのつきあい方から友人関係を類型化し、その発達の変化について検討した。中学生から大学生までの青年を対象とした質問紙調査を行い、「友達とのかかわり方に関する姿勢」と「自分がかかわろうとする相手の範囲」の2次元によって友人関係が整理されることを明らかにした。この2次元から得られる友人とのつきあい方として、青年期のはじめには「浅く広くかかわるつきあい方」が多く見られるが、年

齢を増すにつれて少なくなっていく。反対に、「深く狭くかかわるつきあい方」は年齢を増すにつれて多くなっていった。このように、友達とのつきあい方は、まず浅いつきあい方から深いつきあい方へと「友達とのかかわり方に関する姿勢」が変化し、次に広いつきあい方から狭いつきあい方へと「自分がかかわろうとする相手の範囲」の変化が起こることが明らかにされた。落合・佐藤（1996）を引き継いだ長沼・落合（1998）は、青年期にみられる友人とのつきあい方を実証的に出来るだけ多く析出し、そこで析出された多種類の友達とのつきあい方について、その底辺に共通してみられる心理的要因を解明する目的で行われた。中学生から大学生までの青年を対象とした質問紙調査を行い、青年期の友達とのつきあい方には、少なくとも16種類があることが見いだされた。この16種類の友人とのつきあい方は「友達とのつきあいの深さ」と「相手との心理的接近の仕方」という2次元で分類できることが明らかにされた。

榎本（1999）は、友人関係を外面的な「活動的側面」と内面的な「感情的側面」の双方から捉え、それぞれの発達の変化とそれらの2側面の関係を検討した。中学生から大学生までを対象とした質問紙調査の結果、活動的側面は「相互理解活動」「親密確認活動」「共有活動」「閉鎖的活動」の4つに、感情的側面は「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」「ライバル意識」「葛藤」の5つに分類された。

1-3. まとめ

友人関係の構造に関する研究は、特定の要因に注目し、その要因を用いて友人関係を類型化するトップダウン型の研究と、実際の友人関係を収集し、それらの分類から友人関係を類型化するボトムアップ型の研究に分けられた。

上野ら（1994）は、「心理的距離」を友人関係を類型化する一つの要因としていたが、友人との具体的なつきあい方を収集、分類した落合・佐藤（1996）の研究においても、「友達とのかかわり方に関する姿勢」として友人との「心理的距離」が抽出されていた。さらに、友人関係の現代的特徴に注目した岡田（1993a）の研究においても、友人といつも一緒にしようとする「群れ志向群」や互いに傷つけないように友人と距離を置いた関わり方をしようとする「対人退却群」といった形で、友人との「心理的距離」が抽出されていた。以上より、友人関係の構造において、友人との「心理的距離」が重要な要因となっていることが推測される。

2. 友人関係の構造と様々な要因との関連研究

本章では、友人関係の構造と様々な要因との関連研究についてまとめる。友人関係の構造と様々な要因との関連に関する研究は、検討されている要因の観点から、個人内要因との関連に注目した研究、個人間要因との関連に注目した研究、環境要因との関連に注目した研究に分類された。

2-1. 個人内要因との関連研究

個人内要因との関連研究では、自己意識やアイデンティティなどの自己に関係する要因、孤独感やシャイネスなどの感情に関係する要因、自己愛傾向などのパーソナリティに関係する要因、欲求に関係する要因などが扱われてきた。

2-1-1. 自己に関係する要因

自己意識 岡田（1995）は、現代青年の友人関係の持つ特徴（岡田，1993a）が、青年自身の自己概念とどのような関連を持つかについて検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、現代青年の友人関係として、「群れ関係群」「気遣い関係群」「関係回避群」の3群を見いだした。「群れ関係群」の青年は私的自己意識得点が低く、自分自身を動的と認知しており、親友像を基準とした現実自己像把握をしていた。「気遣い関係群」の青年は、内省が高く、現実自己像と理想自己像の相関が高いなど従来の青年期の特徴として記述されてきた特徴が見られた。「関係回避群」の青年は、自己像と親友像の関わりが希薄で、自己と非自己を明確に区別する傾向が強かった。岡田（1999a）は、岡田（1995）と同様に、現代青年の友人関係の特徴と自己意識との関連について検討し、現代青年に特有とされる性質は青年が周囲に自分を合わせることによって生じたものであり、青年自身はむしろ伝統的青年観に近い意識を持っていると考察した。二神・神谷（2003）は、榎本（1999）における友人関係の活動的側面と感情的側面の特徴と自己意識との関連を検討した。中学生を対象とした質問紙調査の結果、友人関係の活動的側面の量が多いほど自己意識が高く、特にその傾向は公的自己意識で顕著に見られることを明らかにした。

アイデンティティ 宮下・渡辺（1992）は、自我同一性と友人関係、父親との関係、母親との関係、教師との関係との関連を検討し、どの対人関係が自我同一性の確立に関係するかを検討した。大学生を対象とした回想法を用いた質問紙調査から、自我同一性の確立は、女子において友人関係との関連がみられたものの、男子においては父親や教師との関係

とより強い関連がみられることが明らかにされた。同様に、宮下（1998）は、大学生を対象とした質問紙調査から、自我同一性の確立と友人関係との関連について検討し、藤田・伊藤・坂口（1996）は、小学生および中学生を対象とし、学校での友人関係と自我同一性との関係について検討した。

2-1-2. 感情に関係する要因

シャイネス・孤独感 石田（1998）は、シャイな人がどのような相互作用を展開させ、どのように親密な友人関係を形成するかについて注目した。友人関係を今まで行われた相互作用と現在の関係の親密性の認知という、行動と認知の2側面から測定し、シャイな人の行動的・認知的特徴が現実の友人関係でも見られるかどうかを検討した。さらに、親密な友人関係を形成できないことによって、シャイな人がどのような状況に陥りやすいかを、孤独感の観点から検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、シャイな人は新たな友人と多くの相互作用を展開させることができず、しかも関係の親密性を実際の相互作用の少なさ以上に過小評価していた。これら2つのプロセスがシャイな人の親密性の認知を低下させ、孤独感を高めていることが明らかにされた。

自尊感情 安藤（2000）は、自他集団および自他の友人関係の評価と自尊感情との関連を検討した。大学生を対象とした質問紙調査を行い、自集団として所属大学を、他集団として所属していない身近な大学について尋ねた。また、自身の友人関係として最も親しくつきあっている同性の友人との関係を、他者の友人関係として一般的な友人関係を想定して回答を求めた。分析の結果、自身の友人関係を一般的な友人関係よりも肯定的に捉えており、その傾向は高自尊心者でより顕著であることが明らかにされた。

2-1-3. パーソナリティに関係する要因

自己愛傾向 小塩（1998a）は、現代青年の心性を探るために、人格障害としてではなく、青年期特有の人格的特徴の1つとして自己愛に注目した。広さと深さの2次元によって分類した4つの友人関係のあり方と自己愛との関係を検討し、深い友人関係を自己報告することと自尊感情とが関連し、広い友人関係を自己報告することと自己愛傾向とが関連していることを明らかにした。関口・吉川（2002）は、友人関係を他者意識と自己愛傾向・対人恐怖心性との関連から検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、人の言動に注意を払ったり、他者の態度や表情を気を付けてみようとしたりする内的他者意識が強いほど自己愛傾向も強く、友人との関連

が近く深いものであることが明らかにされた。長沼・落合・落合(2000)は、相手との適度な心理的距離を模索する際に生じる葛藤である「山アラシ・ジレンマ」に対する心理的対処反応と自己愛傾向との関連を検討し、心理的対処反応の特徴を明らかにしようとした。大学生を対象とした質問紙調査から、心理的対処反応には、自己愛傾向のうち注目・賞賛欲求の要素が特に関係し、中でも相手を束縛し相手の存在を常に確認しようとする「しがみつきの心理的対処反応が自己愛と関係することが明らかにされた。

対人恐怖心性 関口・吉川(2002)は、大学生を対象とした質問紙調査から、友人関係を他者意識と自己愛傾向・対人恐怖心性との関連から検討した。分析の結果、人のことをあれこれ考えるような空想的他者意識と他者の外見が気になる外的他者意識が強いほど対人恐怖心性も強く、友人関係は浅く、友人との距離を取ることが明らかにされた。同様の研究として、岡田(1996)は「ふれあい恐怖」傾向と「気遣い」「ふれあい回避」「群れ」の3種類の現代青年の友人関係の類型との関連について検討した。

2-1-4. 欲求に関係する要因

欲求 榎本(2000)では、榎本(1999)で検討した友人関係の活動的側面と感情的側面について、「相互尊重欲求」「親和欲求」「同調欲求」の3つの欲求との関連を検討した。中学生から大学生までを対象とした質問紙調査から、3つの欲求すべてに「信頼・安定」「不安・懸念」の感情が関わり、すべての活動に「親和欲求」が関係していた。

2-2. 個人間要因との関連研究

個人間要因との関連研究では、友人との心理的距離や、友人関係の親密化過程などが扱われてきた。

2-2-1. 友人との心理的距離に関する研究

金子(1989a)は、青年期における親からの心理的離乳に注目し、親密さの一指標となる心理的距離の概念を用いて、青年期の親子・友人関係を比較検討した。高校生と大学生を対象とした質問紙調査の結果、青年期には親から離れていくというわけではなく、女子青年においては母子関係が継続されるということを明らかにした。藤井(2001)は、「近づきたいけれど近づきすぎたくない」「離れたいけれども離れすぎたくない」という友人関係における適度な心理的距離を模索する葛藤を「山アラシ・ジレンマ」としてとらえ、「山アラシ・ジレンマ」の構造とそれに対する心理的対処法について検討した。大学生を対象とした質問紙調査から、「山アラシ・ジレンマ」を「近づきたいー近づきすぎたくない」

ジレンマと「離れたいー離れすぎたくない」ジレンマに分けて構造を検討した。また、心理的対処反応として「萎縮」「しがみつきの見切り」の3種類があるが、いずれも非常に不安定な対処であることを明らかにした。同様の研究としては、長沼ら(2000)が挙げられる。

2-2-2. 友人関係の親密化過程

山中(1994)は、対人関係の親密化過程について、出会ってから極めて初期の対人的相互作用の様態がその後の相互作用の型を決定するという「関係性の初期分化現象」を、友人に対する親密度と友人との行動の側面から検討した。大学生を対象とした、入学後1週間、2週間、4週間、2か月半の計4回のパネル調査の結果、出会って2週間後には将来の関係の性質が分化することが明らかにされた。同様の研究として、山中(1996)は関係の初期分化現象を社会的スキルと信頼感の関連から検討し、山中(1998)は事例分析から検討した。

一方、下斗米(1990)は、対人関係の親密化が段階的に進むと仮定し、相手に対する親密度の段階と、自己開示及び類似・異質性認知との関連について検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、相手との親密度が増加するにつれて、お互いの関係に機能的な役割行動が明確化し、その役割行動の基礎として異質性認知がなされるようになり、異質性認知のための情報収集として関係内で自己開示が促進されることが示唆された。同様の研究として、下斗米(1999)は、友人関係において期待される役割行動をを収集し、親密化の段階における役割行動の差異について検討した。

2-3. 環境要因との関連研究

環境要因との関連研究では、従来見られなかった携帯電話やPHSなどの新しいメディアに関する要因、学校場面などの特定の場面に関する要因、性役割などの社会的規範に関する要因などが扱われてきた。

2-3-1. 新しいメディアに関する要因

木下・吉野・出海・斉藤・村田(1997)は、携帯電話やPHS・ポケットベル等の新しいコミュニケーションメディアに関する研究が、主に道具の使われ方や効用感、社会生活に与える影響などに注目して行われており、対人関係に注目した研究は充分に行われていないことを指摘した。石井(1999)は、メディア利用と友人関係の規範化について検討した。高校生を対象とした質問紙調査の結果、高校生がメディアを同じくすることによって友人とのつながり意識を持ち、友人に内面的な満足を得られる

反面、つながりからの脱落という不安も同時に抱えていることが明らかにされた。尾崎・久東（1999）は、コミュニケーションメディアと交友関係意識について検討した。女子大学生を対象とした質問紙調査の結果、直接会うなどの対面コミュニケーションを希望する者は交友関係を広げていく方向に、逆に携帯電話や電子メールなどの非対面コミュニケーションを希望する者は友人との深いつきあいを志向する傾向が見られることが明らかにされた。同様の研究として、塩森・林（2002）は、携帯電話利用に関する態度調査から、携帯電話を利用する友人関係が相手との関係を選別する友人関係であることを明らかにした。松島（2000）は、友人関係の発展と自己開示との関連を、電子メールや携帯電話などのコミュニケーションメディアの利用を通じて検討した。新美・松尾・永田（2003）は、大学から社会人への環境移行段階における友人関係の維持と携帯電話などの移動体通信の利用状況の現状について報告した。

2-3-2. 学校場面に関する要因

鈴木・藤生（1999）は、友人に対する自己効力感と大学満足度および友人の数との関連を検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、自己効力感と大学満足感および友人との良い経験との間に関連がみられることが明らかにされた。笹山（2001）は、学校風土および友人・教師関係が学校適応感に与える影響を検討した。中学生を対象とした質問紙調査の結果、学校風土の評価が高い、もしくは友人関係が良好であれば、学校適応感は高くなることが示され、特に生徒の協力・主体性と友人関係とが大きな影響を及ぼすことが明らかにされた。

2-3-3. 社会的規範に関する要因

和田（1993）は、同性友人関係における性差について、このような性差が生じる原因として男女の社会化に注目した。社会において期待されている各性に適する行動の内在化の程度を測定するものの1つとして性役割を挙げ、性役割の差が同性友人関係に及ぼす影響を自己開示のみではなく、友人関係に望むものを通して検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、男性においては、女性性が自己開示を促進し、男性性が共行動を重視させており、いずれも性役割タイプがそれぞれの性差を強める方向に作用していた。一方、女性においては、男性性が自己開示をしない方向に、女性性が自己開示をする方向に作用しており、従来の性差の結果と一致することが明らかにされた。同様の研究としては、性役割同一性に注目した和田（1996）の研究が挙げられる。

五十嵐・庄司（2002）は、青年期の友人関係と性行動との関連について、友人関係の基礎的な側面と性に関する友人の役割の側面から先行研究を概観し、友人関係が青年期の性行動に対して、多側面で関連していることを考察した。また、五十嵐・庄司（2003）は、大学生を対象とした回想法を用いた質問紙調査から、友人関係と性行動との関連を実証的に検討した。

2-4. まとめ

友人関係の構造と様々な要因との関連に関する研究に関して、自己意識やアイデンティティ、感情、欲求といった個人内要因との関連に注目した研究、友人との親密化や関係性といった個人間要因との関連に注目した研究、そしてメディア利用や学校場面といった環境要因との関連に注目した研究の観点から先行研究を整理した。

関連研究の領域ではある程度の研究蓄積があるが、現在のところ関連研究で得られた知見が構造研究に還元され生かされているとは言い難い。特に、環境要因との関連について、近年、携帯電話やインターネット利用が急速に普及している一方、出会い系サイトなどこれらの新しいメディアを介した社会的問題も増加している。そのため、メディア利用と友人関係との関連について検討することが求められているが、現在のところ現状報告が中心となっている。今後は、友人関係の構造との関連や他の心的要因との関連について検討していくことが必要となるであろう。

3. 友人関係の発達の变化に関する研究

本章では、友人関係の発達の变化に関する研究についてまとめる。友人関係の発達の变化に関する研究は、発達の变化を検討する対象から、友人関係の構造の発達の变化に関する研究、関連研究における発達の变化に関する研究、そして健全な発達の变化ではなく、病的な状態における友人関係に関する研究に分けられた。

3-1. 友人関係の構造の発達の变化に関する研究

友人関係の構造について検討した研究において、落合・佐藤（1996）は、友人とのつきあい方から類型化した友人関係について、その発達の变化について検討した。中学生から大学生までの青年を対象とした質問紙調査の結果、各学校段階別の友人とのつきあい方の変化が明らかにされた。また、榎本（1999）は、友人関係を外面的な「活動的側面」と

内面的な「感情的側面」の双方から捉え、それぞれの発達の変化について検討した。中学生から大学生までを対象とした質問紙調査の結果、活動的側面では発達の変化が見られた一方、感情的側面では肯定的な感情と否定的な感情が混在し、発達の変化はあまり見られないことが明らかにされた。小野・戸田(2002)は、榎本(1999)の枠組みを踏襲し、友人関係の活動的側面と感情的側面の関係について検討した。中学生を対象とした質問紙調査の結果、友人関係の発達の変化は男女とも2年生を境に友人との親密な関係を築くことから、友人関係の質的な変換期が中学2年生であることが明らかにされた。

3-2. 関連研究における発達の変化に関する研究

榎本(2000)は、中学生から大学生までを対象とし、友人関係の活動的側面と感情的側面について欲求との関連を検討した。藤田ら(1996)は、小学生と中学生を対象とし、友人関係と自我同一性との関連を検討した。二神・神谷(2003)は、中学生を対象とし、友人関係の活動的側面と感情的側面の特徴と自己意識との関連について、榎本(1999)における知見と比較した。しかし、関連研究においては、研究の多くが大学生を対象としており(岡田, 1995; 宮下・渡辺, 1992; 安藤, 2000; 小塩, 1998a など)、発達の変化について十分に検討されているとは言い難い。

3-3. 友人関係と病的状態に関する研究

ここまでは、健全な発達過程における友人関係の変化についてまとめた。しかし、友人関係が健全に発達せず、何らかの病的な状態に陥ることも考えられる。具体的には、人格障害傾向と友人関係との関連や、いじめや不登校と友人関係との関連などが考えられる。本節では、不適応などの病的な状態と友人関係の関連について検討した研究を紹介する。

高橋(2001)は、不登校生徒の友人関係について、社会的スキル、対人不安、自己効力感の観点から検討した。中学生を対象とした質問紙調査から、不登校の生徒は、友人関係において自分に自信がなく、積極的に友人にかかわろうとしないことが明らかにされた。岡田(1999b)は、関係の深まりを回避するといった現代青年の特徴と、境界人格障害傾向と自己愛傾向といった人格障害傾向との関連を検討した。大学生を対象とした質問紙調査の結果、友人からどう見られているか気にする傾向が高いほど境界人格および自己愛の病理的側面との関連が高いことが明らかにされた。

3-4. まとめ

友人関係の発達の変化に関する研究は、友人関係の構造に関してある程度みられた。一方、友人関係との関連研究において発達の変化はほとんど検討されておらず、病的な状態における友人関係の研究もほとんどみられない。今後、関連研究の領域などで発達の変化に注目した研究が増加することが期待される。

4. 今後の友人関係研究の展望

本研究は、1980年代半ば以降の青年期の友人関係に関する研究について、友人関係の構造を検討する研究(構造研究)、友人関係の構造と様々な要因との関連を検討する研究(関連研究)、そして友人関係の発達の変化を検討する研究(発達研究)の3つの側面から概観した(Table 1)。これら3つの側面は相互に関連しており、構造研究で明らかにされた友人関係の構造に関して、関連研究において心的要因との関連を検討し、その結果がさらに構造研究に対して影響を与え研究の幅が広がっていくといえる。また、それぞれの発達の変化を検討することによって、各発達段階における友人関係の構造の変化や関連する要因の変化が明らかになり研究が深まるといえる。このように、青年期の友人関係研究は、これら3つの研究側面が互いに影響を与えながら研究全体として発展していくと考えられる(Fig. 1)。

1980年代半ば以降の青年期の友人関係に関する研究を概観した結果、1990年代は、研究の量と質ともに構造研究が中心であったが、2000年代に入り研究の中心は構造研究から関連研究へと変化してきた(Table 2)。特に、1990年代後半から携帯電話やPHSなどの移動通信が急速に普及するとともに、2001年は「ブロードバンド元年」と呼ばれるようにインターネットが常時接続へと変化している。このような状況で、友人関係の様相も、従来の対面を中心とした関係に加えて様々なメディアを介した関係も増えてきており、近年メディア利用と友人関係との関連を検討する研究が増加している。また、1998年に栃木県で発生した中学2年生男子の女性教師刺殺事件以降、ごく普通の少年が「キレる」事件が問題化している。このような社会問題を背景として、ストレスや学校適応などと友人関係との関連を検討する研究も増加している。しかし、これらの関連研究で明らかにされた知見によって、構造研究で明らかにされた知見が再検討される段階には至っておらず、発達研究に関してはまだほとんど研究が蓄積されていない。今後の青年期の友人関係研究は、関連

Table 1 本研究の枠組み

分類	内容・研究例
○構造研究	
トップダウン型	特定の要因に注目して類型化 心理的距離と同調行動傾向に注目（上野ら，1994）
ボトムアップ型	実際の友人関係を収集・分類して類型化 現代青年に特徴的な友人関係に注目（岡田，1993a） 具体的な友人とのつきあい方に注目（落合・佐藤，1996） 友人関係の活動的側面と感情的側面に注目（榎本，1999）
○関連研究	
個人内要因との関連	自己意識（岡田，1995），アイデンティティ（宮下・渡辺，1992）など シャイネス・孤独感（石田，1998），自尊感情（安藤，2000）など 自己愛傾向（小塩，1998a），対人恐怖心性（関口・吉川，2002）など 相互尊重欲求・親和欲求・同調欲求（榎本，2000）など
個人間要因との関連	心理的距離 友人との心理的距離（金子，1989a；藤井，2001） 親密化過程 友人との関係の進展（山中，1994；下斗米，1990）
環境要因との関連	メディア利用 携帯電話，電子メールなどの利用（木下ら，1997） 学校場面 学校場面における友人関係（鈴木・藤生，1999） 社会的規範 性役割（和田，1993）や性行動（五十嵐・庄司，2003）
○発達研究	
構造の発達の变化	友人関係の構造の発達の变化を検討 友人とのつきあい方の発達の变化（落合・佐藤，1996） 友人関係の活動的側面と感情的側面の発達の变化（榎本，1999）
関連要因の発達の变化	友人関係に関連する要因の発達の变化を検討 欲求（榎本，2000），自我同一性（藤田ら，1996）など
病的状態との関連	不適応などの病的な状態と友人関係の関連 不登校生徒の友人関係（高橋，2001），人格障害傾向（岡田，1999b）

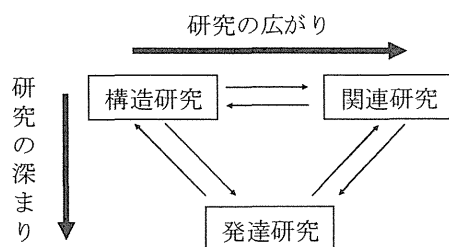


Fig. 1 青年期の友人関係研究の展開

研究について知見を蓄積するとともに，関連研究で得られた知見に基づいて友人関係の構造を再検討する必要があるといえる．その上で，友人関係の構造や関連要因の発達の变化を検討する研究が求められるだろう．

引用文献

安藤清志 2000 自他集団および友人関係の評価と自尊感情 東京女子大学比較文化研究所紀要，

61, 1-14.

有倉巳幸・佐藤広一・香妻幸子・猿渡 功 2002 中学生の対人関係の希薄さに関する研究（3）－受容に焦点を当てて－ 日本教育心理学会第44回大会発表論文集，239.

大坊郁夫 1995 同性友人関係における対人特性とパーソナリティ要因との関係 日本心理学会第59回大会発表論文集，208.

榎本淳子 1996 青年期の友人関係の変化 日本教育心理学会第38回大会発表論文集，125.

榎本淳子 1998 青年期における友人への欲求の発達の变化 日本心理学会第62回大会発表論文集，298.

榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化 教育心理学研究，47（2），180-190.

榎本淳子 2000 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連 教育心理学研究，48，444-453.

浜崎美保 1999 青年期における傷つきやすさと友人関係について 日本教育心理学会第41回大会発

Table 2 1985年以降の友人関係研究

	友人関係の構造に関する研究	友人関係の構造と様々な要因との関連研究				
		個人内要因との関連研究			個人間要因との関連研究	
		自己	パーソナリティ	感情・欲求	心理的距離	親密化
1985				友人関係における欲求と安定性 (楠見)	友人関係の親密さ (伊藤)	
1986						
1987						
1988	友人への期待と現実の友人 (梅本), 交友関係の分析 (渋谷・渋谷)				友人関係における親しさと Equity (井上)	友人関係における行動期待 (佐藤・下斗米)
1989	自己及び対人関係 (岡田)			孤独感・疎外感と友人関係 (湯田ら, 千葉ら)	親子・友人関係での心理的距離 (金子), 親子・友人関係での心理的距離 (金子)	対人関係の持続・安定性 (松浦)
1990	自己及び対人関係 (岡田)					対人関係の親密化 (下斗米)
1991		友人関係と自我同一性・日中比較 (張・高木)				
1992	現代青年の友人関係 (岡田)	自我同一性と友人関係 (宮下・渡辺)				
1993	友人関係に関する考察 (岡田)	友人関係と自己意識 (岡田), 友人関係のストレスとセルフ・モニタリング (水野・橋本)				
1994	青年期の交友関係 (上野ら), 友人像と友人関係 (岡田)					関係性の初期分現象 (山中)
1995		友人関係と自己像・友人像 (岡田)			社会的スキル・友人関係 (戸ヶ崎ら), 友人関係における対人特性 (大坊)	
1996	友達とのつきあい方の発達的变化 (落合・佐藤), 友人関係の変化 (榎本)	友人関係とアイデンティティ (藤田ら)	友人関係とふれあい恐怖的傾向 (岡田), 友人関係におけるアサーション (柴橋)		交友関係での協同・単独行動と対人認知 (弓削)	初期分化現象と社会的スキル・信頼感 (山中)
1997		友人関係と自己像 (岡田)				
1998	同性の友達とのつきあい方 (長沼・落合)	友人関係とアイデンティティ発達 (宮下)	自己愛傾向と自尊感情・友人関係 (小塩), 自己愛傾向と友人関係 (小塩)	友人関係の親密化とシャイネス・孤独感 (石田), 友人関係への欲求の変化 (榎本)	対人反応の効果予期と友人関係 (難波)	初期分化現象の事例分析的研究 (山中)
1999	友人との活動と友人に対する感情 (榎本)	友人関係と自己意識 (岡田)	自己愛傾向と友人関係 (小塩), 傷つきやすさと友人関係 (浜崎)			親密化と役割行動期待 (下斗米)
2000	交友関係の形成過程 (石田・吉田)		自己愛傾向からみた山アラシ・ジレンマ (長沼ら)	友人関係の評価と自尊感情 (安藤), 欲求と感情・活動との関連 (榎本)		友人関係における自己表明 (柴橋)
2001	友人関係の変化 (手塚・古屋), 友人関係における性差 (松並・中村)	アイデンティティ形成と友人関係 (清水・白鳥), 友人関係と自己意識 (渡邊・塩見)	自己受容性と友人関係 (廣貴)		友人関係における山アラシ・ジレンマ (藤井)	友人関係における自己表明と他者の表明 (柴橋)
2002	友人関係の現代的特徴 (岡田), 友人関係の活動的側面と感情的側面 (小野・戸田), 友人関係の構造 (岡田), 中学生の対人関係の希薄さ (猿渡ら)		対人恐怖心性と自己愛傾向 (関口・吉川), 内省傾向と山アラシ・ジレンマ (藤井)		中学生の対人関係の希薄さ (香妻ら, 有倉ら)	
2003		自己意識 (二神・神谷), アイデンティティの確立 (古野・藤原)	対人恐怖心性と自己愛 (栗谷・本間)			

(注：太字は学会誌論文・紀要・報告書)

環境要因との関連研究			友人関係の発達的变化に関する研究			社会事象
メディア利用	学校場面	社会的規範	友人関係の構造	関連研究での発達的変化	病的状態・適応	
						いじめの重大な社会問題化
						中学における登校拒否の増加
		友人関係と性および性役割 (和田)				
		友人関係期待と年齢・性・性役割同一性 (和田)	友達とのつきあい方の発達的变化 (落合・佐藤)	友人関係とアイデンティティ (藤田ら)		援助交際が社会問題化
情報化と交友関係ネットワーク (木下ら)						移動通信の普及率60%突破
						栃木県で中2男子が女性教師をナイフで刺殺
メディア利用 (石井), パーソナルメディアと交友関係意識 (尾崎・久東)	大学満足度と友人関係 (鈴木・藤生), 学級集団内の交友関係と学級満足感 (石田・吉田)		友人との活動と友人に対する感情 (榎本)		友人関係と人格障害傾向 (岡田), 友人関係におけるストレス (井手)	
自己開示とメディア (松島), パーソナルメディアと交友関係意識 (久東・尾崎, 尾崎・久東)				欲求と感情・活動との関連 (榎本)	友人関係の心理的ストレスモデル (三浦・上里), 友人関係と適応 (岡田)	
	友人・教師関係と学校適応感 (笹山)	性・物理的距離と友人関係 (和田)			不登校生徒の友人関係 (高橋)	ブロードバンド元年
通信メディアの選択, (宮木) 親指ネット (塩森・林), 友人関係とメディアコミュニケーション (岡本ら), 友達観と通信メディア (原田・原田)	学校における友人関係への援助 (鎌田)	性行動 (五十嵐・庄司), 友人関係のルール (畠山)	友人関係の活動的側面と感情的側面 (小野・戸田)		友人関係でのストレスの評定 (橋本)	
友人関係の維持と移動体通信 (新美ら), パーソナルメディアと交友関係意識 (尾崎・久東)	学校適応感 (田口ら)	性行動 (五十嵐・庄司), 友人関係のルール (畠山)		自己意識 (二神・神谷)		

- 表論文集, 606.
- 橋本 剛 2002 大学生の友人関係におけるストレスの自己評定と他者評定—親密性や社会的スキルは友人の悩みの理解に寄与するか— 日本教育心理学会第44回大会発表論文集, 601.
- 原田朋子・原田悦子 2002 現代の青年期における友達観と通信メディアの影響 日本教育心理学会第44回大会発表論文集, 240.
- 畠山 寛 2002 青年期の友人関係のルールに関する研究(4) 日本教育心理学会第44回大会発表論文集, 403.
- 畠山 寛 2003 「同性友人関係の深さ・広さ」とルールとの関連 日本教育心理学会第45回大会発表論文集, 585.
- 廣實優子 2001 青年期における自己受容性と友人関係との関連 日本心理学会第65回大会発表論文集, 669.
- 古野景子・藤原珠江 2003 現代青年の友人関係とアイデンティティ確立との関連 長崎純心大学心理教育相談センター紀要, 2, 13-24.
- 藤井恭子 2001 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析 教育心理学研究, 49, 146-155.
- 藤井恭子 2002 青年の内省傾向と友人との山アラシ・ジレンマ 日本教育心理学会第44回大会発表論文集, 303.
- 藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳 1996 小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究—全国9都県での質問紙調査の結果より— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 36, 105-127.
- 井手さゆり 1999 中学生の友人関係におけるストレス—異なるつきあい方がストレス反応に及ぼす影響— 日本教育心理学会第41回大会発表論文集, 489.
- 五十嵐哲也・庄司一子 2002 思春期・青年期における性行動と友人関係との関連について 教育相談研究, 40, 77-83.
- 五十嵐哲也・庄司一子 2003 高校時の性行動と友人関係との関連について 教育相談研究, 41, 59-67.
- 井上和子 1988 友人関係における親しさの程度とEquity 日本教育心理学会第30回大会発表論文集, 510-511.
- 石田靖彦 1998 友人関係の親密化に及ぼすシャイネスの影響と孤独感 社会心理学研究, 14(1), 43-52.
- 石田靖彦・吉田俊和 1999 学級集団内の交友関係が学級満足感に及ぼす影響(1)—学級構造の認知と集団内地位との関連— 日本教育心理学会第41回大会発表論文集, 257.
- 石田靖彦・吉田俊和 2000 交友関係の形成過程に関する縦断的研究(3)—交友相手との志向性の類似度と、教師によるその認知— 日本心理学会第64回大会発表論文集, 202.
- 石井久雄 1999 メディア利用と友人関係の規範化—高校生を対象にした調査を手がかりに— 筑波大学教育学系論集, 23(2), 85-95.
- 伊藤裕子 1985 友人関係の親密さについて 日本教育心理学会第27回大会発表論文集, 530-531.
- 鎌田裕美 2002 学校における思春期女子の友人関係への援助—友人関係場面での被援助志向性を中心に— 日本教育心理学会第44回大会発表論文集, 17.
- 金子俊子 1989a 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 金子俊子 1989b 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離 日本心理学会第53回大会発表論文集, 63.
- 木下富雄・吉野絹子・出海光子・斉藤哲也・村田晴路 1997 情報化が若者の交遊関係ネットワークに及ぼす影響の研究—電子メディアの創り出す新しい人間関係— マツダ財団研究報告書青少年健全育成関係, 10, 15-27.
- 香妻幸子・佐藤広一・猿渡功・有倉巳幸 2002 中学生の対人関係の希薄さに関する研究(1)—学校適応感と不登校感情に焦点を当てて— 日本教育心理学会第44回大会発表論文集, 237.
- 栗谷初子・本間友巳 2003 中学生にみる対人恐怖心性と自己愛傾向との関連について 日本教育心理学会第45回大会発表論文集, 90.
- 楠見幸子 1985 友人関係における欲求ならびに現実次元での安定性の研究 日本心理学会第49回大会発表論文集, 727.
- 久東光代・尾崎かはる 2000 パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(4)—携帯電話・電子メールの利用目的との関連— 日本教育心理学会第42回大会発表論文集, 155.
- 松並知子・中村 晃 2001 友人関係における性差 日本心理学会第65回大会発表論文集, 959.
- 松島るみ 2000 自己開示と青年の友人関係 応用教育心理学研究, 17, 29-36.
- 松浦 均 1989 対人関係の持続・安定性—大学生の友人関係について— 日本教育心理学会第31回大会発表論文集, 286.

- 宮木由貴子 2002 青年層の通信メディアの選択と友人関係～音声コミュニケーションと文字コミュニケーション～ LDI REPORT, 137, 27-49.
- 宮下一博・渡辺朝子 1992 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要, 40, 107-113.
- 宮下一博 1995 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝(編)講座 生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し－青年期(pp.155-184) 金子書房
- 宮下一博 1998 青年の集団活動への関わり及び友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要 第一部, 46, 27-34.
- 三浦正江・上里一郎 2000 中学生の友人関係に関する心理的ストレスモデル構成の試み 日本心理学会第64回大会発表論文集, 99.
- 水野邦夫・橋本 幸 1993 友人関係のストレスとセルフ・モニタリングの関係 日本心理学会第57回大会発表論文集, 152.
- 長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- 長沼恭子・落合幸子・落合良行 2000 自己愛傾向からみた友人関係における「山アラシ・ジレンマ」への「心理的対処反応」の特徴 筑波大学心理学研究, 22, 183-190.
- 難波久美子 1998 対人反応の効果予期と友人関係について 日本教育心理学会第40回大会発表論文集, 204.
- 新美明夫・松尾貴司・永田忠夫 2003 大学時代の友人関係の維持とメディア利用 愛知淑徳大学論集－コミュニケーション学部篇一, 3, 105-119.
- 二神多栄・神谷ゆかり 2003 中学生の友人関係と自己意識の関係について 児童教育研究, 12, 75-81.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達的变化 教育心理学研究, 44, 55-65.
- 岡田 努 1989 現代青年における自己及び対人関係に関する探索的研究 日本心理学会第53回大会発表論文集, 23.
- 岡田 努 1990 現代青年における自己及び対人関係に関する探索的研究(第2報) 日本心理学会第54回大会発表論文集, 145.
- 岡田 努 1992 現代青年の友人関係に関する一考察 日本心理学会第56回大会発表論文集, 159.
- 岡田 努 1993a 青年期における友人関係に関する考察 青年心理学研究, 5, 43-55.
- 岡田 努 1993b 現代青年の友人関係と自己意識に関する考察 日本心理学会第57回大会発表論文集, 32.
- 岡田 努 1994 現代青年の認知された友人像と友人関係 日本心理学会第58回大会発表論文集, 43.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 岡田 努 1996 現代大学生の友人関係と「ふれあい恐怖」的傾向の関連について 日本心理学会第60回大会発表論文集, 294.
- 岡田 努 1997 現代青年の友人関係と自己像に関する発達的研究 日本心理学会第61回大会発表論文集, 229.
- 岡田 努 1999a 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について 教育心理学研究, 47, 432-439.
- 岡田 努 1999b 現代青年の友人関係と人格障害傾向の関連 日本心理学会第63回大会発表論文集, 926.
- 岡田 努 2000 現代青年の友人関係と適応の関連について(中学生期を中心として) 日本心理学会第64回大会発表論文集, 61.
- 岡田 努 2002a 現代青年の友人関係の構造についての検討 日本心理学会第66回大会発表論文集, 31.
- 岡田 努 2002b 友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究 金沢大学文学部論集 行動科学・哲学篇, 22, 1-38.
- 岡本 香・高橋 超・江川朋幸 2002 大学生の友人関係とメディアコミュニケーション行動の関係－メディアコミュニケーションの心理的特性認知を中心として－ 本教育心理学会第44回大会発表論文集, 507.
- 小此木啓吾 1984 現代青年への視覚－精神分析学的青年論 青年心理, 43, 156-176.
- 小野智希・戸田須恵子 2002 中学生の友人関係に関する研究－活動の側面と感情的側面からの一考察－ 北海道教育大学紀要(教育科学篇), 53(1), 1-12.
- 小塩真司 1998a 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290.
- 小塩真司 1998b 青年の自己愛傾向と友人関係－高校生を対象として－ 日本教育心理学会第40回大会発表論文集, 148.
- 小塩真司 1999 高校生における自己愛傾向と友人

- 関係のあり方との関連 性格心理学研究, 8 (1), 1-11.
- 尾崎かほる・久東光代 1999 パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識 日本女子大学紀要 人間社会学部, 10, 223-236.
- 尾崎かほる・久東光代 2000 パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(5) - 女子学生の友人とのコミュニケーションスタイル - 日本教育心理学会第42回大会発表論文集, 156.
- 尾崎かほる・久東光代 2003 パーソナルメディアの多様化と青年期の交友関係意識(6) - 女子学生の友人とのコミュニケーションスタイルと社会的スキル - 日本教育心理学会第45回大会発表論文集, 271.
- 佐藤寛之・下斗米淳 1988 友人関係における行動期待についてⅡ 日本心理学会第52回大会発表論文集, 214.
- 笹山 晃 2001 学校風土と友人・教師関係が中学生の学校適応感に及ぼす影響 日本教育心理学会第43回大会発表論文集, 456.
- 猿 渡 功・佐藤 広一・香妻 幸子・有倉 巳幸 2002 中学生の対人関係の希薄さに関する研究(2) - 希薄さタイプごとの特徴に焦点を当てて - 日本教育心理学会第44回大会発表論文集, 238.
- 関口愛・吉川佳余 2002 他者意識の違いによる青年期の友人関係について - 対人恐怖心性と自己愛傾向との関連から 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, 7, 19-33.
- 千石 保・鐘ヶ江晴彦・佐藤郡衛 1987 日本の中学生 - 国際比較でみる 日本放送出版協会
- 柴橋祐子 1996 青年期の同性の友人関係におけるアサーション 日本教育心理学第38回大会発表論文集, 542.
- 柴橋祐子 2000 青年期の友人関係における自己表明の心理的背景 日本教育心理学会第42回大会発表論文集, 650.
- 柴橋祐子 2001 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち 発達心理学研究, 12 (2), 123-134.
- 渋谷園枝・渋谷昌三 1988 大学生の交友関係の分析(1) 日本心理学会第52回大会発表論文集, 216.
- 清水紀子・白鳥優子 2001 青年期女子のアイデンティティ形成と友人関係 日本教育心理学会第43回大会発表論文集, 518.
- 下斗米淳 1990 社会的フィードバックへの対処方略の類型化と、その選択に際しての規定因に受け手の感情が及ぼす効果 社会心理学研究, 6 (1), 52-61.
- 下斗米淳 1999 対人関係の親密化過程における役割行動期待の変化に関する研究 専修人文論集, 64, 1-32.
- 塩森継紀・林 理 2002 「親指ネット」と若者の友人関係の変容 帝京経済学研究, 35 (2), 43-54.
- 鈴木由美・藤生英行 1999 女子大学生の友人数と自己効力について 大学満足度と過去の友人関係を中心として 日本教育心理学会第41回大会発表論文集, 744.
- 田口雅徳・大谷哲朗・平井誠也 2003 学内・海外における交友関係と学校適応 日本教育心理学会第45回大会発表論文集, 368.
- 高橋 学 2001 不登校生徒の友人関係に関する一考察 日本教育心理学会第43回大会発表論文集, 260.
- 手塚千恵子・古屋 健 2001 前青年期から青年期にかけての友人関係の変化 日本教育心理学会第43回大会発表論文集, 340.
- 千葉雄志・古屋陽子・古屋 健・湯田彰夫 1989 青年期における孤独感・疎外感と友人関係Ⅱ - 高校生の場合 - 日本心理学会第53回大会発表論文集, 258.
- 戸ヶ崎 泰子・秋山 香澄・嶋田 洋徳・坂野 雄二 1995 中学生の社会的スキルが友人関係と学校不適応感に及ぼす影響 日本教育心理学会第37回大会発表論文集, 557.
- 東京都生活文化局 1985 大都市青少年の人間関係に関する調査 - 対人関係の希薄化の問題との関連からみた分析 - 東京都生活文化局
- 張 日昇・高木秀明 1991 友人関係と自我同一性の関連に関する日中青年の比較研究(1) - 目的および方法 - 日本心理学会第55回大会発表論文集, 574.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, 42, 21-28.
- 梅本信章 1988 友人への期待と現実の友人についての一考察 日本教育心理学会30回大会発表論文集, 514-515.
- 渡邊伸子・塩見邦雄 2001 中学生・高校生における友人関係と自己意識との関係について 日本教育心理学会第43回大会発表論文集, 246.
- 碓井真史 2000 人間関係の心理 岡村一成・浮谷秀一(編著) 青年心理学トゥデイ (pp.115-130) 福村出版

- 山中一英 1994 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討 実験社会心理学研究, 34 (2), 105-115.
- 山中一英 1996 大学生の友人関係の親密化過程に及ぼす個人差要因の影響 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), 43, 221-229.
- 山中一英 1998 大学生の友人関係の親密化過程に関する事例分析的研究 社会心理学研究, 13 (2), 93-102.
- 湯田彰夫・千葉雄志・古屋陽子・古屋健 1989 青年期における孤独感・疎外感と友人関係Ⅲ－性差と学年差の検討－ 日本心理学会第53回大会発表論文集, 259.
- 弓削洋子 1996 交友関係にみられる協同・単独行動と対人認知との関連 日本教育心理学会第38回大会発表論文集, 275.
- 和田実 1993 同性友人関係：その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, 8 (2), 67-75.
- 和田実 1996 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67 (3), 232-237.
- 和田実 2001 性, 物理的距離が新旧の同姓友人関係に及ぼす影響 心理学研究, 72 (3), 186-194.

(受稿3月18日：受理5月19日)